

マニ教神話における2神と そのパルティア語讃歌

須 永 梅 尾

Two Gods in Manichaean Myths
and its Parthian Hymns
by
Umeo Sunaga

I はじめに

パルティア語で書かれた断片史料M 741 とよばれるマニ教の写本については、久しく未発表のままであったが、テキサスのオースティン大学、J. A. Dabbs 氏がベルリンで撮った写真版をW. B. Henning 氏のもとに送付されてきたものを、M. Boyce 女史が注解を加えて公表したのが1951年のことであった^①。

この史料にはマニ教神話の研究者にとってかなり興味のある内容が含まれている。まずこの史料は Recto 頁と Verso 頁とに分れ、そこに2つの讃歌が記されており、更に詩の各節がアルファベットの工夫され、しかもパルティア語によるオリジナルな内容であることがあげられよう。いい換えると、詩の各節の冒頭にある語のイニシアルがパルティア語のアルファベットの太文字で書かれているのが、それらのうちで特異的である。また2つの讃歌が神話的に前後する2つの創造神話をそれぞれに主題としていて、その神話の内容は極めて詩的で暗示的であるので、マニ教神話に関する予備的知識をもたないと容易に理解できない難しさがある。ここで用いられる語や詩句には、オリジナルな原本（シリア語で書かれたもの）からやや隔った後代のマニ教神話の表現に属すると考えられるものが多い。またこの写本の筆者が原本にかなり精通していたものと推測されるのであるが、物語の筋をある程度自由に展開させて原本を変改しているところが見られるのは注意すべき点であろう。

最初の讃歌にみられる神話の主題は「光の処女」によるデーモンの誘惑とデーモンの地上への降下についてであり、第2の讃歌ではデーモンの両親から人類のアダムとイブが誕生する秘密についてがそれである。本稿では M741（以下本写本と略称する）を通して、マニ教の救済観に重要な位置を占める2つの創造神話に活躍する主な神とデーモンに、新たな神名が与えられていることの意味を些さか考察してみたいと思うのである。

II M741断片史料の内容

本写本はさきに記したように Recto 頁と Verso 頁に分れ、かなりよく保存されているのが写

真でわかるであろう。丁寧にはっきりと書かれた文字で、2行1節毎に整えて並べられ、前の1節と後の1節との間には1行分の空白があげてある。また各行中の Caesura は1つの大きい丸点。で記されている。1頁は大体10節分のスペースがあり、上欄にも空白がある。今ここにその原文と拙訳を紹介したいと思うが、原文中の()の文字は不鮮明を、[]は欠字・・・・は判読困難な文字とその数、[・・・・]は欠字の推定数、[]は脱文をそれぞれ示し、訳文中の()は意味を明らかにするために訳者が補ったものである。

M 741

(R) (1) (a) 'st'nyd rwšn 'c hw 。
pd ws gwng u brhm

(1) 彼(第3の使者)はさまざまな姿、形をしている(万象)から光を取り出す。

(b) pd nmr u pd 'stft 。
'c bnd wyš'hyd bstg'n

それも温和な方法と苛酷な方法とで、桎梏から(光の)囚人を解き放つ。

(2) (a) pw'cyd wx[y]byy jywhr 。
u dhyd nmyzyšn 'w hwyn

(b) kw wzynd pdyc hw dydn 。
u hxsynd 'w hw p'dgyrb

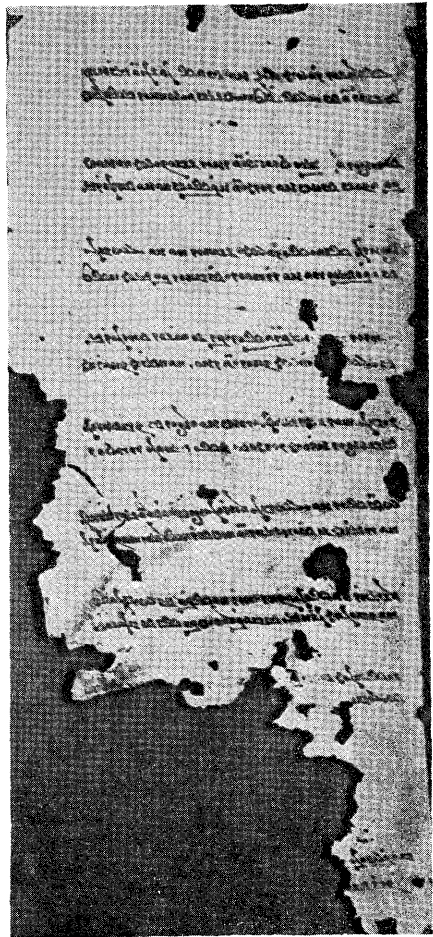
(3) (a) c(y)hrg sdwys rwšn 。
nm'yh w hw 'šmg

(b) pd wxybyy 'w hw dr'wyd 。
prm'yd kw b(w)n 'st

(4) (a) [q]'ryd (d)[(・)](t)'bxrwsyd 。
kd ny wynyd p'dgyrb

(b) pd 's[py](r) rwšn z'yd 。
u dhyd 'w 'bryn z'wr'n

(5) (a) rymg 'wd qrmgbg 。



M741 (Recto page)

(2) 彼は自らのいのちを清め、そして(天空に捕われている)デーモンたちに(女の)その形を追い求めて、動き出すように励ました。

(3) 光輝く Sadwēs は自分の姿、形をデーモン(アルコンの別名)に見せる。

彼(デーモン)は彼女を(光の)エッセンス(精)と思いこんで、叫び声をあげる。

(4) 彼(デーモン)は種子を蒔く……(女の)形を見ぬ時は(苦しげに)唸めく。

光は天空に生れ、彼女 (Sadwēs) はより高き力(をもつデーモン)に光を与える。

(5) (水にぬれた) 埃りとくずが地上に、彼

- 'c hw tcyd pd zmbwdyg
(b) pdmwcyd hrwyn dydn 。
pd ws b'wg "jyd
(6) (a) šfrysyt hw 'šmg t'ryg 。 (6) 暗黒のデーモンは裸身で狂乱している自
cy pdrwft u bwd brhng 分が恥かしくなる。
(b) 'w 'bryn ny pry'b'd 。 彼(デーモン)はもっと高いところへ到着
u 'c pdr'st bwd 'h'z [p]rgwdg できなかったし、今まで得たものも失っ
てしまった。
(7) (a) tnb'r twsyg wz'd 。 (7) 彼(デーモン)の身体は抜け殻のようにな
'dr 'wsxt pd šrmgyft り、汚辱の思いに沈んだ。
(b) 'w zmyg'n gr'b pdmwxt 。 彼は獸的性情を起こす大地の懷の中に自
'c kw sd pd mgwnyft 分を埋めた。
(8) (a) nys'gyn m[··](k)[(8) 栄光の(第3の使者)……………
] (b) wynd 彼らは……………になる。
(b) pd 'ym(y)[n これらの……………を通して

(空 白)

- (9) (a) mwššyg (k)[(9) ……………を救い出しつつ
(b) [p](d) rz(w)r pn(d) ['n 真直ぐな道に沿って
(V) (10) (a) 'c 'br wnwh (p)[r](x)[y]zyd 。 (10) 見よ、目覚めたもの(グノーシス)を救い
hw mwšš šhrd'ryft wzrg の偉大な王国が高い(ところで)
(b) pdr'st 'w z'nynd'n 。 待ちうけているので、彼ら(デーモン)は
kw 'stym pd hw 'ngwynd ついにはそこに平和を見出すのだ。
(11) (a) bzkr pysws t'ryg 。 (11) 罪深き暗黒の Pēsūs は獸的性情をもっ
pd mgwnyft hrw'gwc tcyd てあちこちと走り回り、上方から下方に
(b) 'w 'bryn u 'dryn hnd'm 。 いたるまで彼女は少しの平和をも与えは
'ngwn hmgyc ny dhyd しない。
(12) (a) gy(r)w[y](d) (bn)dyd rwšn 。 (12) 彼女(Pēsūs)は光を捉え、5つの大きい
pd hwyn šwh tnb'r wzrg 体内に閉じ込める。
(b) pd zmyg 'b u 'dwr 。 地中に、水中に、火中に、風の中に、そ
w'd d'lwg 'wd d'md'd して動植物の中に。
(13) (a) dysyd pd ws cyhrg 。 (13) 彼女(Pēsūs)はさまざまな姿形に光を形
ng'ryd pd w(s) p'dgyrb どり、それが高い(光の)
(b) prg'cyd pd bndyst'n 。 国に到着できないように、牢内に固く足
kw ny sn(') ['w) bwrzw'r 枷をはかせてしまう。
(14) (a) hrw'gwc wfyd 'wd ncynynd 。 (14) 彼女は(牢を)全面にわたって、(逃げ
phrgb'n hyrzyd 'ž 'br られないように)織物で被い、それに見
(b) "z 'wd 'wrjwg 'd hw 。 張りを置く。貧欲と渴愛が、光の囚人仲
kyrd 'hynd h'mbnd 間になったのだ。
(15) (a) wyw wyg'ng 'myxt 。 (15) 彼女はこれら5つの大きい体内に、破壊
pd hwyn šwh tnb'r wzrg 的な空気を混入した。彼女は自分の体を

- (b) dysyd wxybyy tnb'r ° 鍛え上げるが、これら(5つの体)の息子
u wyg'nyd 'w hwyn z'dg'n たちは(ついに)破壊される。
- (16) (a) z'wr'n rwn'n 'c 'br ° (16) 上方にある光の力は、全てのデーモンた
pdrwbynd h(rw)yn 'šmg'n ちを破碎する。もっと高いところにいる
(b) z'dg'n cy hw pysws ° Pēsūs の造った息子たちをも。
cy (')st pd 'bryn wy'g
- (17) (a) jyw'hr [.....n](h) njynd [°] (17) 生命を……………彼らは抑える(?)
[.....] twsyg krynd ………………彼らは虚しく……………
……………
[.....] yn 'zgryft ………………をとり除かれて……………
- (18) (a) ……………… (18) ………………
[.....'](d)ryn zhg ………………より低い子供……………
(b) ………………
[.....'] br 'bgwynd ………………彼らは増えて……………
- (19) (a) ……………… (19) ………………
[.....'](') bryn z'wrn ………………より高き力を……………
(b) ………………
[.....'] skwh u ny'zw(nd) ………………貧しく、みじめに

III Qnygrwšn と Sadwēs

前章で本写本の全文について紹介したわけであるが、そのうち最初の讃歌 (Recto頁) の内容に立ち入ってみよう。

この讃歌のうち、はじめの3分の2までの節(a~s)の部分が亡逸していることは間違いない。この残りの部分で男のデーモン('šmg'n)を誘惑するものとして Sadwēs という名の神が出現する。この Sdwēs なる神の名はこれ以前のマニ教文書、史料では Qnygrwšn として見えるが、Sadwēs としては一度も記録されておらず、却って非マニ教的文書での Pahlavi語で Satwēs、ザラスシュトラ教のアヴェスターにおいては Satavaēsa として現れてくるものである。Henning 氏の指摘によれば、一般には Satavaēsa は神と考えられるのであるが、必ずしも男神^②だけとは考えられず、むしろ惑星 Anāhitā の対抗者たる女神と関連すると見られていた。本写本では明らかにマニ教神話に出てくる「光の処女」(Kanigrošn) のパルティア語の同じ翻訳名として Sadwēs が使用されている。このことには、マニの死後に起きたザラスシュトラ教の復興という初期ササン朝ペルシアにおける時代背景にあって、マニ教の神とザラスシュトラ教の神とを斉合せしめようとする傾向が働いているのを看過すわけにはいかないのである。

「光の処女」については光の父 Zarwān のでなく、第3の使者 (パルティア語で Nrys fyzydyg = Narisaf Yazd) の呼び出しの際に重要な役割を担う女神である。それも彼女は12の処女といわれるように1体ではなく、第3の使者の娘たちで、使者がデーモンたちを誘惑するとき、この娘たちのさまざまな姿を借りてデーモンの欲情を刺激して、彼らの Sperma を地上に雨として降らせる。その結果地上に植物が、続いて動物が発生することになる。これが「光の処女」に纏る創造神話と考えられる梗概^{あらまし}である。しかしこの「光の処女」の本来の神性は純粋に雨の女神にすぎなかったのではないだろうか。

ユプト語史料のうちの Kephalaia, このなかには A.D. 3 世紀末にまで遡る古いものが多いが含まれているが, XCV のなかに彼女が雨と霜, 雹, 雪, 雷, 稲妻をデーモンの住む雲の中から呼び出すさまが記述されている。また中世ペルシア語の断片史料の M292 が, 保存が悪いが, この「光の処女」(qnygrwšn) への信仰を記録しており, それがソグド語史料 M140 における記述と類似しているのである。引用してみると,

(R) (6) ('ty štyg (7) mwrt'jw'ndy c'wn (8) w'rt'y 'ty pryβy'tyy (9) xw qnygrwšn
kwndy (10) skwn pw'nc'n zmyy (11) 'mynny wrty 'tyh (12) pty'z 。。

(光の処女はそのことを実行する。雨と雲から, 絶えることなく, 冬と夏とから, 春と秋とから。)とあるように, 彼女には誘惑者の性格が現われていない。これを或いはまだ現われていないと解すべきか, それとも既に捨て去ったものと考えるべきであろうか。パーラヴィ語史料 Škand Gumānik Vičār^⑧ の反マニ教的文章の中では, 雨の神話とデーモンたちの誘惑の神話とが渾然と溶けあっているものとして「光の処女」の話に触れている。このパーラヴィ語記者は雨をデーモンたちの種子(Sperma)であるとして, この誘惑の物語を頑固なほどに語り続ける。このパーラヴィ語史料の編集に当たった P.J. de Menasce 氏はこの神話は本来2つの別々のものであり, これを1つに結びつけようとしたのがこのパーラヴィ語記者であるとして, その誤りの責任を彼に帰せしめている。だがこれは誤りであったのだろうか。私にはむしろ当時(恐らく3世紀末か4世紀初めの頃か)のマニ教徒が「光の処女」の性格に, つまり本来の雨の女神としての「処女」に誘惑者の役割を付与し, それに Sadwēs という名を付けることによって2つの神話を1つの神話に統一しようとしていた事実を反映したものと考えるべきで, これを非マニ教徒たるパーラヴィ語1記者のないうる創作神話ではありえないのである。M. Boyce 女史はこの矛盾については自然現象の説明と神々の行為たる神話とを区別するのは近代科学の分析的視点の問題であって, 神話そのものは1つのものと見るべきだと指摘して^⑨, パーラヴィ語記者の記述を支持したに留まったのは, 「処女」が本来的に2つの性格をもったものとする前提に立っていたからであろうと思われる。

反マニ教的文書を書いた記者たちは, ザラスシュトラ教, キリスト教を問わず, 以上の神名の他に「処女」を virgo, puellae pulchrae, virtutes, d'vāzdaḥa x'varigā などといろいろに呼んで記述しているが, このような相違する名称は F. Cumont 氏の指摘した如く, マニ教思想の複合的重層性によることはいうまでもないのであるが, この名称の変化の根柢に, 単なる翻訳における呼び名の相違だけではない, 光の神性から悪への擬装的接近というマニ教的救済観の内的必然的变化の傾向を指摘することができる。と同時にまたこれらの名が与えられるに伴って, オリジナルなマニ教的神々の性質に, 異質の, あるいは類似した他神の性質の混入は避け難く, 少なからず変容を余儀なくされるという面もあることに注意すべきで, このことを次に考えてみたい。

第3の創造における指導的な神としての使者が, 光の父に呼び出されるモチーフに「光の処女」の存在が注目されたことは既に述べたが, その処女がオリジナルな原本(シリア語本)では雨の女神であったのが, 次第に変容して「処女」となるのであるが, 第3の創造神話をマニが創作する際にはまだこの「処女」は主体性を持たず, 使者の娘, それも12の処女たちとして, 使者(父)の行なう誘惑者の行為の補助的役割を果たすに過ぎなかったのに, 3世紀末か4世紀初めの頃にか, とにかくマニの死後のある時期に, その補助的地位から誘惑の主体者に変容を遂げることになったと推定される。ここでは「処女」は自ら12の処女の姿に変身する女神となったのである。勿論この変身(メタモルフォーシス)はデーモンを誘惑するためであることに変りはない。トルコ語のマニ教史料たる T II D171にある讃歌のなかに興味ある記述がある。^⑩

「…偉大なる父，天上の主宰者， Zārwān の愛しい娘のように，燃えるような光の女神が姿を変えることで……」

ここで注意したいのは，今までの史料では「光の処女」は第3の使者の娘であったのが，天上の主宰者 Zārwān の娘に変貌してしまっていることである。ところで上記「愛しい娘」という同じ表現が，コプト語史料の詩篇集のなかにも見出すことができる。「満ち溢れる力を，得もいわれぬ美しさで羞じらう（父）の愛しい娘，神聖な光の処女…」と。

しかし一方でコプト語史料のもう一つのなかでは，彼女の変身についての言及はない。そして誘惑の神話にあっては，処女は何度か1体の女神として表現されるに過ぎない。「第3番目は光の処女であって，アルコン（ギリシア語でデーモンに当る）たちの邪心と力を彼女の姿態で夢中にさせてしまう栄光の知恵である……」。この事は Mir. Man., I のなかにおいてもその言及は1体の女神に関してである（h'n srygr kyrb cyhr 'y yzd'n）。ここでは12の処女たちは影のように1処女の後に隠れてしまい，単なる šahrdārīft に過ぎないものとなっている。上記のコプト語史料での彼女が処女として呼び出されるときは，光栄ある，生ける炎，美しきもの，聖らかな心，わが愛する，とかの彼女にかって与えられた詩的形容句（エピセツト）は使われてはいない。そこでは光の処女は1つの明確な輪郭をもつ神として，マニ教徒たちの観想のなかで，言葉を超えて生き生きとしたリアリティを保ったのである。

「処女」の12の処女から変身と主体化を自ら可能とした1女神への変化は，本写本での Sadwēs について眺めてみると，Sadwēs という神名を使用したのは，救済を実現していく第3の呼び出しの段階で，12の処女としてでなく，また第3の使者の娘としてでなく，光の父の娘として，誘惑者として主体性を得た1女神としての個性と活躍とを強調することにあつたと考えられるとともに，かって F. Cumont 氏が論じたようなアジアのアフロディテーたる Anāhitā としてではなく，ペルシア北東部のマニ教徒たるパルティア人が「光の処女」を雨の神としてわれわれに知られる Anāhitā の対抗者 Satavaēsa と 斉合せようとした現実を象徴したものと受取らざるを得ない。

IV Namraël と Pēsūs

次に本写本の Verso 頁の第2の讃歌について考察してみよう。

この讃歌は前置きの部分にアルファベット構成の埒外と思われる不明瞭な行があるが，それ以後 a から z までの各行はほぼ完全に保存されている。

主題は暗黒の勢力による光の（要素の）捕虜（幽囚）とその牢獄＝人間の創造に関する神話である。この讃歌は本写本の第1の讃歌のあとを継承するもので，第1の讃歌の終りに近い7節でデーモンが地上に降りたことが語られているが，このデーモンによって最初の人間が創造されるのである。そのなかで殊に興味がある点は，このデーモンに Pēsūs の名を用いていることである。Henning 氏はこのデーモンはもう1人のデーモン Šaklōn の配偶者の名で，パルティア語やソグド語の文書等に何回となく出てくると M. Boyce 女史に語ったという^⑨。またアダムとイブを生んだ偉大な雌獣として，その名も8世紀末のシリアのキリスト教司教 Theodorus bar Kōnai によれば Namraël，12世紀末のシリアの Michael によれば Nabrōël と記されている。

中世ペルシア語史料の，例えば Mir. Man., I 史料にはこの名で記されていないが，それらしきものは，ライオンの尾をもち，好色で，野蛮で，罪深く，恐ろしい雄と雌の Asrēštār とし^⑩て記述されている。これはマニ以前の遠いバビロニア的伝承にみる悪魔を彷彿とさせるものが

①
ある。

デーモンが悪であるのは、悪神Āz("z)が彼らの体内に入り、彼らを悪神の代理者にするからで、彼らは他の動物たちに欲望と配偶者を求めることを教えるのである。この1対のデーモンについては非マニ教史料でも言及しており、Šaklōn を姦姪の王子と呼んでおり、そこには自然と単なる動物としてよりも、それ以上に人類の父（生みの親）として見ようとする傾向がある。本写本のこの讃歌でもその誇張の傾向は Pēsūs の上にも歴然と認められ、彼女を擬人化された物質(Hyle)＝暗黒とするだけでなく、人類の母としての営みを積極的に実行するさまが描かれている。コプト語史料の Kephalaia のなかの1節にも、アルコン Ἀλκων (デーモンの別名) の rymg 'wd qrmgbg が地上に降りたのは物質としてなのであり、地上で植物を作り、それが食物として動物の肉体内に滲透するのも物質であると述べている。その中での「物質たるアルコンから発する罪、それは使者(第3の使者)の姿のところまで登ってゆき、(あの)箇所から切り取ったものが地上に落ちてきた…」ものが罪、物質＝Āzであり、これが Šaklōn と Pēsūs の体内へ移入する。彼らは第3の使者を見たこともないのに、使者に似たアダムとイブという子供を生むことができたのは、彼女の、Pēsūs の能力によってであると Mir, Man., I の史料に記してある。では一体どうして使者を見たこともない彼ら一対のデーモンが使者に似た人間の子を生むことができたのか、諒解に甚だ苦しむところであるが、さきのコプト語 Kephalaia 史料にこれとは反対に「第3の使者を見たことの罪の力によって崇高者の姿に似せて描かれたのがアダムとイブである…」^⑬とする記述があり、この矛盾をどう解いたらよいであろうか。事実 Kephalaia のコプト語記者はこの問題について I vi, の初めの部分を割いて言及しているところを見ると、コプトのマニ教徒の間でもかなり古い時代からこの矛盾が論議の対象となったことが窺えるのである。私にはこの矛盾は矛盾として認める他はないのであるが、ただ見た、見ないに拘わらず、人間の子供を生むことができたのは Pēsūs の能力によってとするその能力という表現に注意したい。この能力とは何を意味するのか。この語に相当する語を本写本の第2の讃歌(14)節の(b)行にある 'wrjwg, これを私は渴愛と訳したが、これは悪、Hyle, 罪と同一視すべきものでなく、むしろ悪、Hyle, 罪でありつつその次元を越えて光、精神の次元に到着しようとする Pēsūs の内にあって自己を光に向って高めようとする促しの力と理解できるのではなからうか。絶対二元論に立つマニの思想からすれば、この理解の仕方は到底認められるはずはないであろう。しかしこの讃歌における Pēsūs の行為を検討してみるとどうしてもそう解釈しないではいられない詩句に更に突き当たる。12節で彼女が折角光を捕え、5人の息子たる大地、水、火、風、動植物のなかへ閉じこめておきながら、15節では逆にこの息子の体中に破壊的な空気を混ぜ入れるという不可解な行為をしているのである。Henning 氏はこの破壊的な空気 wyw wyg'ng (wēw wigānag)^⑭を、暗黒のエーテル ardāw frawardīn に対立する暗黒の要素であると示唆されているところから考えて、暗黒の要素も一様でない違いがあることが知られる。暗黒でありながら、暗黒である自己の殻を破ろうとする空気—それ(wēw)をBailey氏はパーラヴィ語の𐭮𐭲(呼吸=息)と同じと解したように—を彼女が息子たちに混入したのは彼女自身の内にそれ(光)に憧れるものがあつたからに相違ない。この矛盾をマニ教の原悪魔観と衝突させずに現実的に方向を転換させようとして出現したのが Pēsūs の名をもつデーモンであったと考えられ、パルティアのマニ教徒の秘められた柔軟な叡智の動きを可能にしたものは何なのかを思わずにいられない。^⑮この仮説が許されるならば、このアダムとイブの母親をめぐる問題を通してコプト語世界のマニ教とパルティア語世界のマニ教とのマニ以後の歴史的相違を探ることができるのではないかと思われるのである。Namraēl から Pēsūs への変化の意味を探ることと同時に、Namraēl と Pēsūs の

違いを究めることは、シリア語を媒介として今後のコプト語史料とパルティア語史料を結ぶ研究の一視角を形成する一助ともなるであろう。

V 語 語

マニはもともとその直筆の文書（7つの正典といわれているもの）ではパルティア語で記したものがなく、何故かパルティア語の神名をも用いてはいないのが特徴的である。パルティアのアルシャク王家の出であったマニの母を通して、マニはパルティア語を知らなかった訳がないのであるが、彼がその言語を用いなかったという点に鋭い洞察のメスを入れたのは Henning 氏で、パルティア王家を滅ぼしたササン朝王家に対するマニの政治的反逆への志向をそこに認めようとしたのである。この問題に今立ち入る余裕はないが、マニの死後3世紀末か4世紀初めの時期にか、マニの構想になる創造神話のなかに Sadwēs と Pēsūs という名の新しいパルティア語の神とデーモンが出現することとなった。バビロニアの地を離れて、パルティア（イラン北東部）の地にマニ教が東漸し、その地に根をおろす過程にあって神話等を翻訳する際にだけに止まらず、伝道を推進する必要性からその地域性に相応しい神々の登場と変容を余儀なくされたり積極的にむしろ変改を試みるようなことが生じてくるのは至極当然なことである。

マニの宗教が紀元3世紀のオリエント（バビロニアを中心とした）世界にあって、古いバビロニアの神話伝承（旧約、マンダ的伝承を含めて）の素材をまずユダヤキリスト教的思考を核としながらも、更にインド・イラン的思考をもってつつみ再構成したところにその思想史的意義を有すると認めるならば、そのようにして成立したマニ教が東方のパルティア地方にその信仰の根を張っていく活動のなかで、徐々にではあるが、マニが素材として取り上げた古いバビロニア的神話のオリジナルな神々に代る新たな神の名によつて生じる変容を甘受しなければならなくなったいわゆる東方化の時期が、パルティア語の本写本の讃歌が作られ誦された時には既に始まっていたと推察できるのである。なお本研究は昭和50年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

(注)

- ① M. Boyce, Sadwēs and Pēsūs, BSOAS, vol. XIII, Part 4, 1951.
- ② W. B. Henning, JRAS., 1942, p. 246
- ③ P. J. de Menasce, Škand Gumānik Vičār, Fribourg, 1945.
- ④ M. Boyce, op. cit., p. 909.
- ⑤ W. Bang, "Manichaeische Hymnen," Muséon, XXXVIII, p. 25.
- ⑥ C. Allberry, A Manichaean Psalm-Book, II. 227-29.
- ⑦ Schmidt-Polotsky, "Ein Mani-Fund," SPAW., 1933, p. 95.
- ⑧ F.C. Andreas-W. Henning, Mitteliranische Manichaica aus Chinesische Turkestan I, 198.²⁶
- ⑨ M. Boyce, op. cit., P. 910.
- ⑩ F.C. Andreas-W. Henning, op. cit., 194¹⁻⁴.
- ⑪ G. Widengren, Mesopotamian Elements in Manichaeism U.U.Å, 1946, p. 31.
- ⑫ Kephalaia, 137²³⁻²⁶.
- ⑬ Keph., 138¹⁰⁻¹³.
- ⑭ W. B. Henning, NGGW.1932, p. 216.
- ⑮ Bailey, BSOS., VII, 1933, p. 83-84
- ⑯ マニ教の絶対的二元論の限界を超えようとする動向と認めるべきか。
- ⑰ F.C. Andreas-W. Henning, op. cit., II, 303¹⁻³.